

ワクチンは、
愛犬を恐ろしい伝染病から
守ってくれます。

あなたの大切な愛犬を伝染病から
守るために、ワクチンを接種して
あげてください。



ワクチンを打ったからと
いって、伝染病を100%予
防できるわけではありませんが、万一感染した場
合でも、症状の軽減
が期待できます。



ワクチンを接種する前に…

愛犬の健康状態を確認しましょう。

- 妊娠している
- 熱がある
- 寄生虫がいる

▶ ワクチンは
打てません。

- アレルギー体質
- 興奮している（神経質）

▶ 獣医師に
ご相談ください。

ワクチンを接種した後は…

安静にして早く免疫をつけましょう。

当日……………安静にして様子を観察

接種2～3日後まで……激しい運動や
シャンプーを避ける

接種2～3週間後まで……他の犬との接触を避ける

※ワクチン接種後に熱がでたり、注射部位を痛がったりすることがあります。そのために元気がなくなったり、食欲が落ちてしまうことがあります。通常は2～3日で回復します。

※アレルギー体質の犬では、まれに「嘔吐」、「下痢」、「唇や^{まぶた}瞼のむくみ」がみられたり、「けいれん」や「虚脱」を起こすことがあります。このような普段と違った様子がみられたら、すぐに当院までご連絡ください。

次回のワクチン接種について、先生と相談しておきましょう。

ゾエティス・ジャパン株式会社

〒151-0053 東京都渋谷区代々木3-22-7

CA-1401-12-HM-771-01
C00938

愛犬の
健康は
予防から

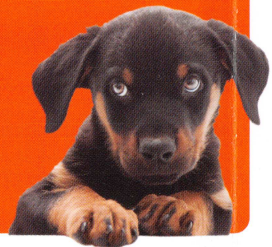


ワクチン接種は、
愛犬を伝染病から守る
大切な習慣です



zoetis

ひとつのワクチンで、 何種類もの病気を予防できる ワクチンがあります。



このワクチンは、
下記の伝染病を予防できます。

犬ジステンパー

高熱、目ヤニ、鼻水がでて、元気や食欲がなくなり、嘔吐や下痢もします。また、病気がすすむと神経系がおかされ、マヒなどの後遺症が残る場合があります。**死亡率の高い病気です。**

犬パルボウイルス感染症

激しい嘔吐、下痢を起こし、食欲がなくなり、急激に衰弱します。重症になると脱水症状がすすみ、短時間で死亡することがあります。伝染性が強く、**死亡率の高い病気です。**

犬伝染性肝炎

発熱、腹痛、嘔吐、下痢がみられ、目が白く濁することもあります。生後1年未満の子犬が感染すると、まったく症状を示すことなく突然死することがあります。

犬アデノウイルス2型感染症 (犬伝染性喉頭気管炎)

発熱、食欲不振、クシャミ、鼻水、短く乾いた咳がみられ、肺炎を起こすこともあります。他のウイルスとの混合感染により症状が重くなり、死亡率が高くなる呼吸器病です。

犬パラインフルエンザウイルス感染症

カゼ症状がみられ、混合感染や二次感染が起こると重症になり死亡することがあります。伝染性が非常に強い病気です。

犬コロナウイルス感染症

成犬の場合は、軽度の胃腸炎ですむことが多いのですが、犬パルボウイルスとの混合感染では重症化することもあります。子犬の場合は、嘔吐と重度の水様性下痢を引き起こします。

犬レプトスピラ感染症

レプトスピラ症は、レプトスピラという細菌による感染症です。レプトスピラに感染しているネズミなどの野生動物の尿や、その尿に汚染された水や土を介して皮膚や口から感染することが知られています。犬を含むほとんどの哺乳類に感染し、発熱や嘔吐、脱水、出血などを引き起こします。**重症化すると死に至ることもあります。**レプトスピラには、いくつかの型(タイプ)があり、カニコーラ型、イクテロヘモラジー型に加えて、最近、グリッポチフォーサ型、ポモナ型の犬レプトスピラ感染症もワクチンで予防できるようになっています。



動物由来感染症

レプトスピラ症は、犬だけではなく人にも感染することがあります。厚生労働省は、このような動物から人に感染する病気を「動物由来感染症」と呼び、注意を呼びかけています。

定期的なワクチン接種で、愛犬を守りつづけてあげましょう。

子犬 (生後2~3ヶ月)

子犬をおうちに迎えたら、まずは
ワクチンについて先生にご相談ください。

産まれたばかりの子犬は、恐ろしい伝染病にかからないように、母犬から免疫を譲り受けています。しかし、生後2~3ヶ月経つとその免疫力は弱まり、さまざまな伝染病に感染する危険性が高まります。

この時期、ワクチンによる確実な予防効果を得るためには、2~3回のワクチン接種が必要です。

成犬 (2歳ごろ~)

定期的なワクチン接種が効果的です。

子犬の時期に、ワクチン接種により、感染症から守ってあげることができても、そのワクチンの効果は徐々に弱まってきてしまいます。

ウイルスや細菌は日常生活のあらゆるところに潜

んでおり、常にあなたの愛犬を狙っているのです。



高齢犬 (7歳ごろ~)

ワクチンの重要性がさらに高まります。

年をとると、さまざまな臓器の機能が弱り、免疫力も低下してきてしまいます。高齢犬は、子犬の時期と並んで、ワクチンによる免疫の強化が重要な時期なのです。

愛犬がずっと元気に過ごせるように、あなたにもできることがあるのです。

